

97, 98 年度の「社会情報調査の方法に関する研究会」について

井上 芳保

■ 1998 年度の「社会情報調査の方法に関する研究会」について

1998 年度の「社会情報調査の方法に関する研究会」は、例年通り、二回分の開催予算が計上されている。そのうちのひとつとして第 11 回を、12 月 12 日（土）、福島大学行政社会学部助教授の高橋準さんをお招きして「ポピュラー文化研究における概念と分析装置」というテーマで開催することができた。

高橋さんは、アルベルト・メルッチの来日インタビューの翻訳を担当したり、ミッシェル・フーコーの「統治」概念についての論文を著すなど理論研究の分野でも活躍されているが、ジェンダー差別に関わる現象やポピュラー文化についての実証的な研究も積極的にされている。特に若い世代にみられる文化現象の研究を最近は精力的にこなしておられるようである。その一環として、1997 年には札幌国際大学の山下玲子さんと共同でアニメ「新世紀エヴァンゲリオン」視聴者の映画館出口調査を実施しておられる。

高橋さんの一連のお仕事を貫くキーワードの一つとして「自己との関わり」を挙げることができるのではないかと思われる。これはメルッチがその社会運動論において論じている現代の複合社会におけるアイデンティティの浮遊という問題群（「私とは誰なのか」という問いの消費現象）と重なるものである。そしてアニメ「新世紀エヴァンゲリオン」こそはまさしく「自己との関わり」という主題がストーリー中にたくさん埋め込まれているこ

とによってヒットを記録した作品といえよう。たぶんそれは若い世代の心の琴線にふれるデリカシーを有した「心の物語」であるからこそ、広範に受容されたのである。

しかし今回はそうした方向性の話題は敢えて禁欲し、アニメ作品をはじめとするポピュラー文化を分析していくための手続きにウェイトをかけた報告をしていただいた。詳しくは今回掲載する高橋論文をご覧いただきたいが、例えば紅一点論のような捉え方がある。こうした構造分析の技法を使って、アニメ作品のメッセージを客観的に解説していく方法は興味深い。社会情報調査の方法としても応用範囲が広いのではないかと思われる。

当日は本学部の教員、学生ばかりでなく、北海道大学、北海道教育大学、北星学園大学、札幌国際大学などからも研究者が訪れた。質疑応答の時間をたっぷりとったことも幸いして、講演内容の細部にまでわたってさまざまな観点から意見が出され、議論が盛り上がりたいへん有意義な研究会となった。

今回ここに掲載するのは高橋準さんに当日の報告内容をもとに新たに書き下ろしていただいた原稿である。ご本人のたつての御希望で通常の論文の体裁ではなく、しゃべったような文体で記述していただいた。結果としてあたかも講演のテープ起こしの記録のような体裁になっている。これはこれで臨場感があって読みやすい。あまり時間がなく、やや無理なお願いだったにもかかわらず、快く執筆を引き受けて下さり、このようにすぐれた内容の原稿を本誌のために寄稿して下さった

高橋さんには改めて感謝申し上げる次第である。

なお、1998年度分の「社会情報調査の方法に関する研究会」はあと一回の開催が予定されている。すなわち第12回として、来る2月27日、京都大学留学生センター助教授の蘭信三さんをお招きして「満州移民研究における社会学的方法の可能性」と題して行われることが予定されている。

■ 1997年度の「社会情報調査の方法に関する研究会」について

1997年度分の企画の話になるが、第10回は、去る1998年3月3日、関西学院大学社会学部教授の大谷信介さんをお招きして「都市的状况と友人ネットワーク：5大学比較調査の結果から」というテーマでの報告が行われた。

大谷信介さんには同じ日に同じ会場で本研究会に先立って開かれた「第6回 社会意識調査データベース・ワークショップ」のコメントーターとしてもおいでいただいたこともあって、やはり他大学から多くの参加者を得て行われ、盛会となった。お忙しい中、本学にお越し下さった大谷信介さんには改めて感謝申し上げたい。

■ 「社会情報調査実習」と本研究会の今後について

「社会情報調査実習」を必修化した3年生の新しいカリキュラムも1998年度からスタートした。幸いなことに学生諸君はフィールドワークを楽しみながら実践してくれたようである。フィールドワークによって異質なものと出会う機会は貴重である。自分の眼で現実の生活者としての人間に直面してみる体験は大学教育の中で大切にされるべきものであろう。また調査の方法は多彩である。調べたい対象が何であり、その調査内容がどのようなものであるか次第で方法は変わるはずである。学生諸君には状況に応じて最も適した方法を臨機応変に選べる柔軟さを「社会情報調査実習」で身につけてもらいたいと思う。

教員の方もさまざまな調査研究に触れて見識を広めておかねばならない。「社会情報調査の方法に関する研究会」の成果は有形無形さまざまな形で我々の研究・教育に役立つこととなろう。これからもこれまでと同様に充実した面白い企画を重ねていきたいと考えている。この研究会に対する一層のご支援をお願いしたい。

「社会情報調査の方法に関する研究会」の開催一覧

	実施日	報告者	報告テーマ	記録
第1回	93年6月4日	大石 裕	「地域情報化研究の課題」	録音テープ保管
第2回	93年7月29日	好井裕明	「意味と社会システム：螺旋運動としてのエスノメソドロジー」	紀要3巻2号に論文掲載
第3回	94年7月28日	高橋和子	「非定型データの分析方法」	紀要4巻2号に論文掲載
第4回	94年10月7日	吉見俊哉	「国民祭典論のための序論的考察：運動会の思想」	『思想』11月号の論文参照
第5回	95年7月1日	瀬地山角	「東アジアの家父長制」	紀要5巻2号に講演録掲載
第6回	95年12月16日	松田博公	「オウム報道の構図と問題点」	紀要5巻2号に講演録掲載
第7回	96年11月7日	亘 明志	「メディアと権力」	紀要6巻2号に講演録掲載
第8回	97年3月8日	山崎晶子	「差別のエスノメソドロジーからMedia Space projectへ」	録音テープ保管
第9回	98年1月31日	谷 富夫	「エスニシティ研究における「世代間生活史法」の試み」	紀要7巻2号に論文掲載
第10回	98年3月3日	大谷信介	「都市的状况と友人ネットワーク：5大学比較調査の結果から」	録音テープ保管
第11回	98年12月12日	高橋 準	「ポピュラー文化研究における概念と分析装置」	紀要8巻2号に論文掲載
第12回	99年2月27日	蘭 信三	「満州移民研究における社会学的方法の可能性」	

